

応用研究論文

由利本荘市石脇通りにおける歴史的景観の再生

研究室による夏期集中研究の取組から

山口邦雄¹

¹ 秋田県立大学システム科学技術学部建築環境システム学科

人口減少社会の到来を背景に、地方都市の市街地再生は我が国の喫緊の課題となっている。本論は、大学研究室による由利本荘市石脇通りの歴史的景観の再生を対象とした集中研究の取組を報告し、この活動から得られた知見を論ずるものである。この取組は2014年の5月からスタートし、8月に歴史的景観の再生・活用の構想を立案した。この構想を地域へ発表したことが契機となり、翌年の2015年には地域から歴史的景観を活かしたイベントの取組が提案され、NPO、町内会、企業を巻き込んで実施された。この過程を通し、研究室が始めた歴史的景観の再生の取組が、幾つかの地域資源の有機的連鎖性を取り戻すことにつながったことを考察し、大学が地域資源の一構成要素であることを具体的に論じた。また、都市・建築系の教育において、こうした取組が学内の座学や演習等では得られない合意形成等の技術の習得において教育的効果の得られることを論じた。

キーワード：地方都市、都市再生、大学研究室、歴史的景観、たんころりん

地方都市における人口減少・高齢化の進展は著しく、民間研究団体である日本創生会議が2014年に公表した資料によると、2040年までに消滅可能性のある都市が896とされ全国に衝撃が走った。これらを背景に、地方が活力を取り戻して人口減少を克服するために、総理大臣を本部長とするまち・ひと・しごと創生本部が内閣に設置された。現在、地方再生と東京一極集中の是正が取組まれている。とりわけ、ソフト面での地方の人口減少の抑制に向けた産業振興や子育て環境の改善、ハード面でのコンパクトシティ形成の潮流と合流した地方都市の市街地再生が喫緊の課題となっている。

これと前後し、観光産業を我が国の力強い経済を取り戻すための重要分野と位置づけられ、日本の基幹産業化と地方創生への貢献を目指す取組が行われている。おりしもクールジャパンの名のもとに、和食や華道・茶道・書道などの日本文化とともに、地方の歴史的景観が海外からも注目を浴びている。歴

史的景観の再生は文化的な側面のみならず経済的側面においても重要となっており、市街地再生の切り札の一つと言えよう。

また、直近のこととして地方総合戦略計画の策定が全国的に進み、地方みずからがソフト・ハードの両面からの地方再生の動きが本格化している。この取組において、地域に存する大学への期待が高まっており、地方大学の果たす役割も議論されている。本学でも地域貢献のあり方が議論され、地域学Ⅰ、地域学Ⅱの科目の新設が予定されているところである。

市街地再生や地域貢献に関連し、建築環境システム学科における都市・建築計画の分野は固有の技術とともに不動産全体を直接的に扱うことから、研究や教育の内容において地域への状況依存度の高いことが指摘されている。それは、とりもなおさず、研究・教育の内容が市街地再生にダイレクトにつながっていることを意味する。そのため、筆者の属する

都市アメニティ研究室（以下、研究室）は、2人の教員と所属学生がそれぞれテーマを持って研究を進めるとともに、研究室としての共通テーマを設定し、現地に赴き合宿形式を伴う夏期集中研究（以下、集中研究）を毎年実施している。座学による研究・教育に加え、現地に出向いての調査結果から何らかの提案をまとめて地元住民に提示し、それをもとに意見交換を持つ機会をつくり出している。研究の深化を図りつつ、最終的には地域の課題解決に向けた動きをつくり出すアクション・リサーチ手法を用いた研究・教育活動である。

本論では、2014年度と2015年度に実施した秋田県由利本荘市の石脇通りを対象とした歴史的景観の再生に関する集中研究の活動を報告し、この活動による①市街地再生に向けた知見の獲得、②地域活動の教育的効果、以上2点を論ずる。

石脇通りの概要と課題

石脇通りの概要

石脇通りは、秋田県立大学本荘キャンパスのある由利本荘市内の市街地のなかで、国道105号と国道7号を東西方向で結ぶ主要な通りの一つである（図1）。トラックやバス等の通行もあり、交通量がその幅員に対して比較的多い通りである。石脇通りの周辺地域は、北前船が寄港した子吉川のかつての川湊に面し、物流の結節点として栄えていた。また、豊かな湧水に恵まれたことから醸造業等の経済活動が盛んな地域であった。しかし、舟運から陸運への転換や産業構造の変化により活力が低下し現在に至っている。

由利本荘市の現在の人口は8.1万人であり、秋田県内で4番目に人口の多い都市である。1975年DID（人口集中地区）を基本とする旧市街地の人口密度は高く、石脇通り地域のような1975年以降に市街化の進んだ市街地でも人口密度の高い地域が見られる（図1）。一方、人口密度の変化の点では、中心市街地において密度低下が著しくなっている（図2）。これが中心市街地の衰退問題である。しかし、中心市街地に対し子吉川を隔てて立地している石脇通りは人口密度の変化が少なく、活力の低下はあるものの

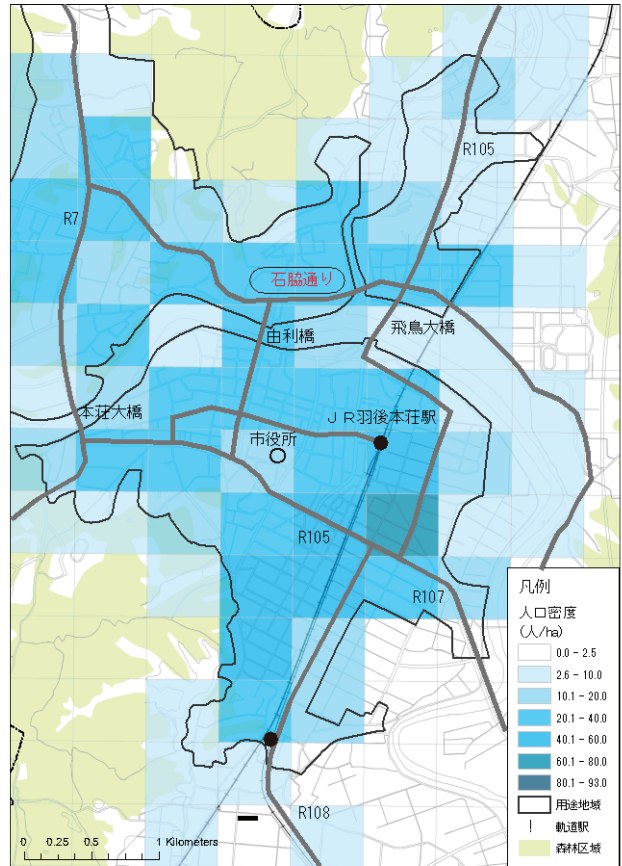


図1 石脇通りの位置と周辺の人口密度（2010年）

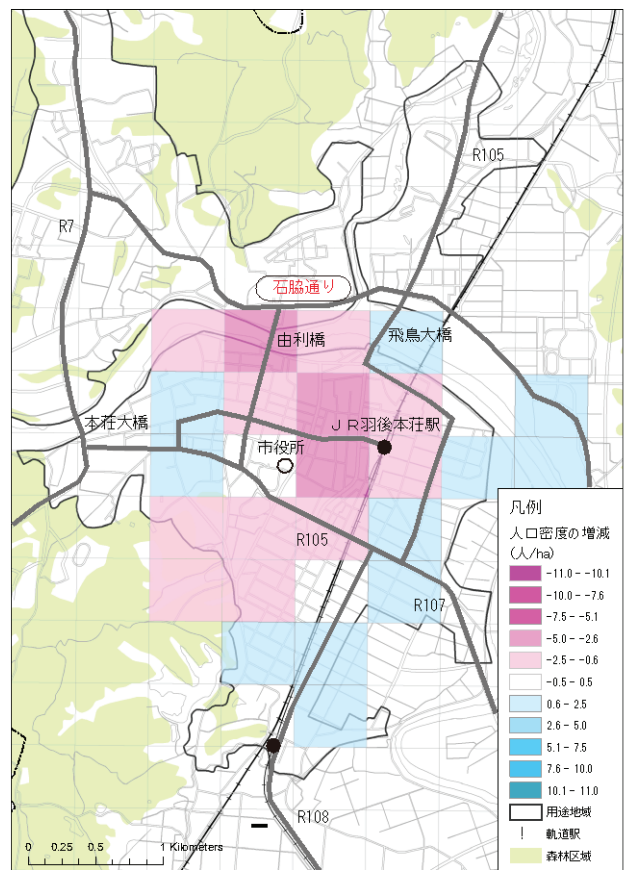


図2 人口密度の増減（2005年-2010年）

衰退という事態までには至っていない。

石脇通りの課題

由利本荘市の中心市街地は土地区画整理事業が進み、現在は県道の拡幅整備と沿道景観形成が取組まれている。また、文化交流館カダレーが建設され、現代的なデザインの市街地景観の形成が進められている。

一方、石脇通りでは土地区画整理事業や道路拡幅事業が行われておらず、またその予定は現時点ではないため、古い町家建築が建替え更新されずに残っている。これにより、石脇通りは本荘地域で唯一歴史的街なみが残るところとなっている。しかし、活力低下は他地域と同様であり、近年では空き家の発生や沿道建築物の建替え更新が緩やかに進み、歴史的景観の喪失の危機が生じている。

都市の魅力の本質は多様性（Diversity）であり、都市・建築分野から言及すれば、現代的な都市景観（Modern Landscape）とともに歴史的な都市景観（Historical Landscape）を持つという多様性が都市の魅力につながっていることになる。由利本荘市の再生につながる魅力強化の点において、石脇通りは歴

史的街なみの軸と位置づけることができ、その景観の再生・活用は全市的にみても重要な課題となっている（図3）。

歴史的景観の再生の取組

集中研究と石脇通り

研究室が取組む集中研究.

石脇通りにおける歴史的景観の再生の取組は、当初、研究室の集中研究を中心に進められた。

研究室の集中研究は、筆者が本大学に赴任した2007年度から毎年開催しているものであり、仙台市、潟上市、鹿角市、由利本荘市、東日本大震災被災地を対象にして実施してきた（表1）。その目的は、当初から以下の3点で定式化している。

- ①実際の都市及び建築を素材に計画やまちづくりについて集中的に調査・研究を実施する。
- ②地域住民・専門家との交流を通じて知見を広める機会を創る。
- ③研究室配属直後の3年生も含め、教員と学生、学生相互間の親睦を深める。

この中の「①実際の都市及び建築を素材に計画やまちづくりについて集中的に調査・研究を実施する。」の目的は、シャレットワークショップとR/UDATの取組を参考にしつつ定式化したものである。シャレットワークショップとは、短期間に集団で問題解決に向けた提案等をまとめる手法である。国内では日本建築学会都市計画教育小委員会が、まちづくり支援活動を実施できる人材育成とそのプログラムの開発を目指して取組んでいる。R/UDAT（Rural and Urban Design Assistance Team：地域・都市デザイン支援チーム）とは、The American Institute of Architects（アメリカ建築家協会）がAdvocate Planning理論に基づいて地域環境改善のために取組んでいるAdvocacy（計画支援活動）である。R/UDATの取組は1967年から始まっており、建築、都市計画、経済、法律等の異なる分野の専門家がコミュニティの要請に基づいて現地に赴き、4日間程度の短期間で集中的な調査・分析を行い、最終的には改善提案を作成する活動である。



図3 本荘市街地における石脇通りの位置づけ

表1 集中研究の実績

集中開催日	研究テーマ	協力
2007 9/21 (金), 22 (土)	第1回 仙台・夏合宿	仙台市都市計画課, 定禅寺通りまちづくり協議会, 名掛丁東名会, あすと長町整備事務所, 阿部重憲 (地域計画研究所)
2008 9/27 (土), 28 (日)	第2回 小玉醸造の蔵および飯田川駅周辺のまちづくり	小玉醸造
2009 9/7 (月), 8 (火)	第3回 潟上市出戸浜駅周辺地区のケース・スタディ	天王公民館連絡協議会, むつみワールド, むつみ造園, 潟上市都市建設課, 河村守信 (都市環境研究所)
2010 9/2 (木), 3 (金)	第4回 鹿角市花輪関善周辺地区のまちづくり活動の提案	NPO関善賑わい屋敷, 鹿角市企画財政課
2011 9/10 (土), 11 (日)	第5回 旭町防災まちづくり共同研究	旭町自主防災会, 由利本荘市危機管理課
2012 9/10 (土), 11 (日)	第6回 中心市街地の再生: 都市計画道路拡幅と空間形成	大門・本町通りまちづくり協議会, 由利本荘市都市計画課
2013 9/9 (月), 10 (火)	第7回 東日本大震災からの2年半後の被災地	新田・引地 (大学0B), 被災地の方々, NPOえがお
2014 8/30 (土), 31 (日)	第8回 歴史的石脇通りの街並み形成と町家の活用像	齋彌酒造, 石脇文化を語る会, 石脇フォーラム, 由利本荘市都市計画課
2015 8/15 (土), 8/22 (土), 23 (日)	第9回 石脇通りと由利橋, 今昔の由利本荘の景観形成	浴衣で歩こう実行委員会

石脇通りを集中研究の対象とした経緯.

今回の集中研究における石脇通りの歴史的景観再生のテーマ設定は、本学の小林淳一副学長が石脇通りに面して空き家となっている町家（通称「田屋」）の活用の相談を受け、筆者に連絡のあったことが発端となっている。

この初期段階で留意したことは、通常の住居や店舗は私有財産であり、その利用について他者が発言することは基本的に差し控えるべきである、という一般的な通念である。これを前提としつつ、しかし、地域の公共性にかかわるような内容、例えば地域活性化に寄与したいがどのような利用の仕方が適切か？あるいは逆に、問題化しそうな利用の仕方であれば地域として如何なる対応がありうるか？といった場合には積極的に係わるべきである、ということである。この連絡を受け、まず筆者が田屋を所有する齋彌酒造の代表取締役社長齋藤浩太郎氏と面会して話を進め、齋藤氏に石脇通りの再生に役立つ利用をしたいとする意向の強いことを確認した。そのため、この相談が個人や一企業の単なる建築修繕・保全活用の枠を越えた公共性を持つ内容と受け止め、地域計画的にどのような展開が考えられるかという視点で対応することとした。さらに、筆者個人での対応ではなく、研究室の研究・教育活動の一環とし

ての対応を考え、建築計画的な面では苅谷哲朗教授とも連携をとりながら進めることとした。

以上が、石脇通りを集中研究の対象とした経緯である。

2014年度集中研究

石脇通り研究のスタート.

研究室における集中研究は、例年どおり5月からスタートした。まず、「田屋」を所有する齋藤氏に來校頂き、石脇通りの抱える課題、通り沿いの空き家であった「田屋」取得の経緯と今後の活用に向けた意向、また地域の様々な団体の活動について、研究室としてヒアリングし、意見交換を行った。

その内容をもとに、研究室内に「A. 街並み再生班」と「B. 田屋の利活用班」を設置し、夏季の合宿形式の研究に備える事前研究を5月から8月の期間に進めた。その内容は、以下の通りである。

《 A. 街並み再生班 》

- ①石脇通りの古い街並みを既存資料により把握
 - ②街並みを現地調査
 - ③歴史的街並みを再生させるための各地の整備事業例の収集・分析
- ・ファサード整備型の「三国街道牧之通りプロジェクト」

- ・市民ファンド型の村上市「黒塀プロジェクト」
- ・住民主体型の足助町「たんころりんプロジェクト」
- ・大学提案型の肘折温泉「灯火プロジェクト」

《 B. 田屋の利活用班 》

①田屋の利活用に向けた運営システム事例の収集・分析

- ・奈良県奈良町の「奈良町物語館」
- ・滋賀県近江八幡市の「あきんど道デイサービスセンター」

②運営主体と活動助成の調査

個人、任意団体、NPO 法人、社団法人等

合宿当日.

合宿を伴う集中研究は、石脇財産区が所有する石脇通り沿いの建物「石脇公德館」を研究作業場として借り、近くの旅館に宿泊するという形をとり 8 月 30 日、31 日の両日で実施した。なお、調査対象とな



図4 石脇通りの景観調査



図5 「田屋」の建物調査

表2 住民の居住継続意向 表3 今後の石脇通り

1. 住み続ける	19
2. 転居する	0
3. わからない	1
4. 無回答	0
計	20

1. 昔の雰囲気がなくなる	7
2. 近代的な街になっていく	2
3. あまり変わっていかない	6
4. その他	2
5. 無回答	4
計	21



図6 合宿作業



図7 地域発表会



図8 ひな街道でのパネル展示

る新町町内会、中町町内会、上町町内会の各会長には予め研究趣旨と調査内容を伝え、調査への協力依頼も合わせて行った。

初日は、まず石脇通りの景観調査、「田屋」内部の調査、沿道住民への意識・意向の聞き取り調査を実施した。この調査結果を分析し、街なみ再生像と田屋の利活用像の構想骨子を検討した。

2 日目の午後は、検討内容を模造紙に表現し、研究の中間発表を地元の町内会長、地元企業、市役所職員等の方々を対象に行った。中間発表の内容は、将来に向けた目標整備像に加え、「住民整備レベル(1年後から)」、「町内整備レベル(5年後から)」、「行政協力レベル(10年後から)」の再生実現のプロセスと運営方法を示した内容である。参加者から質問や要望等を受けつつ、意見交換を行った。

地域発表会の開催とその後.

合宿を終えて帰校後、研究室で中間発表会の際に出た意見・要望を反映させた「石脇地区歴史的環境の利活用」と題する構想パネル(次ページ図9)とプレゼンテーションスライドを作成した。この成果を地元役員のみでなく広く地域住民にも説明して一緒に考える機会とするため、町内会に協力頂き各戸に広報した上で、石脇公德館を会場に10月16日に地域発表会を開催した。この発表会には25人の出席があり、意見交換を行うなかで石脇通りの問題点や今後の再生方法の議論を行った(図7)。

また、3月14日から22日にかけて、由利本荘市ではひな街道の取組があり、本荘地域のメイン会場である石脇公民館において多数の雛人形の展示が行われた。その際、地元から構想パネルを展示したいので貸してほしい旨の連絡あり、地元住民の手により会場の一部が構想パネルのコーナーとして整備され展示された。ここで興味深いことは、貸し出した構想パネルを地元の役員等が来場者に説明したことである(図8)。我々研究室が作成した構想パネルを理解するのみに留まらず、それに共感し他者に伝えようとする姿勢が見えたことは、歴史的景観再生の第一歩として特筆すべき事項であった。

さらに、夏季の集中研究とともに研究室の卒業研究と修士研究の展示・説明を卒業・修了展として学外で実施しており、今期は2月13日、14日に由利

本荘市のカダーレを会場に開催した。この中でも集中研究も展示とプレゼンテーションを行い、これが次年度の大きな取組へと発展していくこととなる。

2015 年度の集中研究

地域と研究室のインタラクション.

卒業・修了展の石脇通り研究の発表を見た NPO 由利本荘にかほ市民が健康を守る会（以下、NPO 健康を守る会）から、2月23日に連絡が入った。NPO 健康を守る会は石脇通りを使ってイベントを考えており、研究室が石脇通りの歴史的景観の再生の活動をしていることを卒業・修了展の発表で知り、石脇通りを素材とした活動を一緒にしないか、というものであった。

NPO 健康を守る会は、医師・看護師らが中心となって活動している団体であり、高齢者等が家に引きこもりがちになっており、健康にとってよいことではないという認識があった。それで、多様な人たちが石脇通りに出てきてもらい楽しんでもらうことをしたいという趣旨であった。そこで、研究室として取組んだ昨年の研究成果と齋藤氏からの相談内容も組み込み、由利橋をライトアップして夕暮れ時の石脇通りを歩いてもらおうという企画を協議し立案した。具体的には、①由利橋をライトアップして健康に対する啓発活動を行う、②古い街並みに合わせて多くの人に浴衣できてもらい、そぞろ歩きできる場や語らいの場を創りだす、③研究室は石脇通りの歴史的な意義や今後の再生についてさらに研究し発表する、以上の3点を骨子とする企画である。

この企画について NPO 健康を守る会のメンバーが地元の3町内会の会長に相談したところ、石脇通りは古い街なみが残るものの地域の活力が低下し、しかしながらどう対応してよいかわからない状態であることが率直に出された。また、昨年度の地域発表会や卒業・修了展に出席し、研究室という外部がこの街なみに興味を持っていることに期待しており、取組の構成団体に入ることに賛同を得た。さらに秋田のプロサッカーチームであるブラウブリッツ秋田、地元の齋彌酒造にもよびかけ、4月29日に「石脇通りと由利橋、今昔の由利本荘を浴衣で歩こう！」実行委員会（以下、実行委員会）を結成するに至っ

た。外部の人間が地域の環境を再評価し、それを活かしたイベント企画を持ち込むことにより、地域も動き出すという流れである。

この動きに呼応し、研究室は2015年度の夏季集中研究を昨年度に続いて石脇通りを対象にすることを決定し、例年通り5月から事前研究に着手した。これから8月23日の「浴衣で歩こう！」のイベント当日まで、計9回の実行委員会を開催し企画を具体化していくこととなる。研究室は石脇通りを対象とした研究に加え、実行委員会のなかの一団体としてイベントの実現に取組むことになった。これにより、地域と研究室の実質的なインタラクションが起動した。

景観演出の取組.

当初のライトアップの企画は、NPO 健康を守る会が実施していた糖尿病啓発のためのもので、由利橋をカラーの投光機で照らして浮かび上がらせる内容であった。それに加え、石脇通りを浴衣で歩くという企画であることから、切妻造妻入の屋根と化粧梁と化粧束、下屋を持つ建築様式による石脇通りの歴史的街並みも印象づけることを提案した。

具体的には、竹籠に和紙を張った行灯「たんころりん」を石脇通りに並べ、夕暮れ時の街並みを仄かな光で浮かび上がらせる景観演出である。「たんころりん」とは、昨年度の集中研究で事例研究したものの一つであり、14年前に愛知県豊田市足助町の住民が考えだした、高さ65～80cm、直径20～30cmの行灯である。但し、研究室学生はもちろんのこと、石脇の住民も実際の「たんころりん」を見たことはない。また、素材の調達、作り方等は皆目検討がつかない状況であった。

景観演出は、専門家集団の高度な技術と潤沢な資金を使えば一時的には功を奏するだろう。例えば、プロジェクト・マッピングなどはその典型である。しかし、地方都市の小さなイベントでの適用は困難であり、また持続性は当然確保されない。むしろ、シューマッハーの提唱する身の丈にあった適正な技術の使用によって持続性は確保されるものとなる。そうした観点から、敢えて自分たちで製作することとした。

まず、7月4日、5日の2日間にわたり「足助たん

ころりんの会」の会員を招聘し、研究室メンバーと実行委員を中心に「たんころりん」製作の技術指導を石脇公德館で受けた。研究室メンバーには、製作技術を習得して「たんころりん」を製作するのみならず、8月に開催する住民参加型の製作作業において製作指導者の役割を果たす任が与えられた。

8月15日の製作作業は、町内会役員によるフライヤーの各戸配布により多くの住民の参加があり、和やかな雰囲気の中で行われた。筆さばきの見事な住民もあり、見事な石脇通り版「たんころりん」が50基完成した。また、「たんころりん」製作準備の議論の際に、通り沿いの家には特別の行事の際に使う屋号・家紋の入った大きな提灯や暖簾が残っていることが明らかになった。今では使うこともなく埋もれてしまっているが、それもイベント当日に出してもらおうということになった。かつての賑わいある通りの再生につながる「気づき」も生まれたのである。

集中研究.

2015年度の研究室は、「たんころりん」製作のみでなく石脇通りの歴史的な意義や今後の再生についてさらに研究し発表するという役割も負っている。

8月の合宿形式をとる現地での集中研究に備え、事前研究を5月からスタートさせた。

昨年度の整備構想の立案において、その実現のステップや町家活用における運営方法の研究はすでに行っている。2015年度は、その整備像の実現に向け、すぐできる街なみ整備に焦点を絞り、事前研究を断続的に進めた。まず、7つの先行事例の情報を収集して同じ視点から分析し、考えられる整備の仕方を「時間」、「費用」、「手続き」、「知識」、「住民主体性」、「材料集め」の観点から検討した。

すぐできる整備の候補は、①格子による設備の修景、②看板のデザイン化、③道路の緑化、④木製の看板・暖簾・垂幕の設置、⑤サイン・案内板の充実、以上の5点が候補として挙げた。さらに、可能性のある観点を含めれば、⑥夜の街なみの演出が加わる結果となった。

一方、調査・整理・分析といった順を追う研究と平行して、⑥夜の街なみの演出に該当する「たんころりん」の製作が、その研究の整理を終える前に先行的に進められた。現実の取組は研究と同時進行の形を取り、アクション・リサーチ手法を伴う集中研究である。

表4 実行委員会の構成団体

- ・NPO由利本荘にかほ市民が健康を守る会
- ・秋田県立大学都市アメニティ研究室
- ・石脇中町町内会
- ・上町町内会
- ・新町町内会
- ・ブラウブリッツ秋田
- ・齋彌酒造



図10 実行委員会の打ち合わせ



図11 製作の技術指導



図12 技術指導の参加者



図13 製作作業（絵つけ）



図14 完成したたんころりん



図15 浴衣で歩こう!のポスター

浴衣で歩こう！イベント

8月23日の午後は、浴衣で歩こう！のイベントの時間帯である。ここからは、集中研究の会場がイベント準備会場へと変化し、13:00 から直前の最終打ち合わせのための拡大実行委員会が行われた。メンバーは、表4の実行委員会の構成団体に加え、交通整理等を担当する地元消防団、浴衣の着付けボランティアで協力する和装学院の方々、そしてイベント進行に協力する地域住民の方々である。

石脇通りの齋彌酒造前の駐車場に本部が置かれ、浴衣コンテストやスタンプラリー、ブラウブリッツ秋田による「たんころフットボールパーク」、研究室のパネル展示が行われた。また、通り沿道には作左部医院の健康チェックコーナーが設けられ、実行委員会の一員である齋彌酒造による「田屋」の活用はもとより、マルイチ醸造元、ヤマキチ醸造所、伊藤製麺、やそべ製麺、吉野屋菓子舗等の店舗の自発的な参加もあり、イベントに多様性が持ち込まれた。さらに 17:30 にあきた舞妓さんが駆けつけ、イベントに華を添えた。これらを通し、会場となった石脇通りは普段とはまったく異なる表情を見せるに至った(図16,17)。

参加者から、「こんな古い建物が残っているとは知らなかった。」「歩いてみて、いろいろな店のあることがわかった。」「ふだん見ている石脇通りとは思えない雰囲気だった。」「本荘市街地にこんなところがあるとは知らなかった。」「来年もぜひ開催してほしい。」「来年は主催者の側に入れてほしい。」等々の声が寄せられた。これを受けて、来年度の浴衣で歩こう！の実施に向け、2月の実行委員会の開催が予定されている。

なお、取組の全体の流れを図18に、主な取組の参加者数を表5に示す。

表5 参加者数

7/4, 5 製作指導	17人+講師3人 (研究室8人)
8/15 製作日	30人 (研究室15人)
8/23 イベント当日	2,000人程度 (研究室16人)

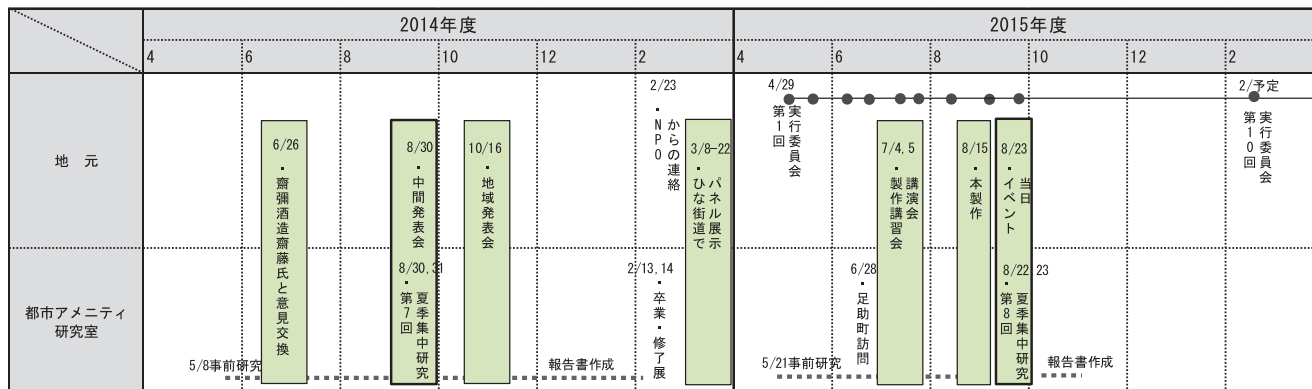


図16 イベント当日の様子



図17 歴史的街なみの演出

図18 集中研究からイベント実施の流れ



歴史的景観の再生に向けた取組からの考察

本論では、空き家活用に関する相談がきっかけとなり、石脇通りの歴史的景観の再生につながる地域イベントへと発展した事例を報告してきた。市街地再生の動きが起動したとみてよいだろう。この取組に対し、以下の2点から考察を加える。

市街地再生に向けた知見

成熟・縮小型の社会に突入した現在において、普遍性を持つ地方都市の再生を考えるならば、それぞれに持つ固有の地域資源を再評価し、その強みをいかしていくことで活路を見出すアプローチが重要となる。この場合の地域資源は、「施設」、「人材」、「コミュニティ」、「文化」、「自然」の各分野から捉えることができ、どの地方都市においても幾つかは存在しているはずである。しかしながら、その強みをいかすまでには至っておらず、地方都市の衰退が進行している現状がある。

本事例をこの観点から考察すると、まず、空き家活用の検討を、町家・歴史的景観という「施設」分野の地域資源の再評価と活用と広く捉え、研究室の集中研究として取組んでいる。次に、その取組がNPO健康を考える会という「人材」分野の地域資源と結びつき、町内会等の「コミュニティ」分野の地域資源も巻き込んでいる。さらに、たんころりんの製作を通して屋号等の入った提灯や暖簾を飾るという気づきも生まれ、「文化」分野の地域資源とも結びついている。8月23日の地域イベントは、こうした取組の2015年度段階での表層的成果である。そして、それ以上に重要な成果は、当初、バラバラの状態であった地域資源が、この取組を通して有機的連鎖性を取り戻したことである。散在した状態の地域資源が有機的連鎖性を取り戻すことこそ市街地再生にとって重要であり、ソーシャル・キャピタルの強化が図られたことになる。持続可能性を有する市街地再生への展望を得たと考えてよいだろう。

また、別の観点では、市街地再生における大学の役割についても、この取組を通して考察できる。本事例では、研究室の集中研究が発端となり、地域資源の有機的連鎖性を取り戻すことにつながった。と

りわけ今回のような石脇通りの歴史的景観の再生をテーマとする取組では、都市・建築計画の専門性が重要な役割を果たし、研究室はここに貢献したことになる。大学が、「人材」分野の地域資源として地域の有機的連鎖性の中に組み込まれる一つのモデルとみてよいだろう。

地域活動の教育的効果

都市・建築計画の分野は、対象とする地域への状況依存度の高いことを冒頭で指摘した。そのため、建築教育の計画系の科目において地域文脈の理解・分析を座学で教示している。しかし、実際に地域に出向き、地域社会に触れての学修は一般には種々の制約より困難となっている。一方で、「建築の拡張」という言葉が議論され、空間像というフィジカルプランの提示のみならず、住民の声を聞きながら合意形成を図り、実現に向けてまとめあげる能力の重要性も指摘されている。

本事例の石脇通りにおける歴史的景観の再生の取組では、再生像をプランとして提示するという一方通行ではなく、地域からの意見を聞き、地域住民とともに再生像を考える機会を創出している。さらに、像の提示、像の合意形成、実現手法の検討という一連のプロセスを経て、歴史的景観再生の実現に向かう第一歩に直接携わる経験を参加学生は得、そのスキルを学んでいる。これらは、学内での座学や実験・実習では得難い教育的内容である。

具体的な地域問題に対して、適切な枠組みを設定した上で地域活動に一構成員として直接関与する今回の取組は、プロジェクト・ベースド・ラーニングの一つのモデルとみてよいだろう。

まとめ

研究室として取組んだ石脇通りの歴史的景観の再生の取組は、幾つかの地域資源の有機的連鎖を生み、市街地再生の契機をつくり出した。地域と大学の関係、およびプロジェクト・ベースド・ラーニング教育を考える上で、一つのモデル的な試みと位置づけることができる。

また、この取組の手順や内容は、新設が予定され

ている「地域学Ⅱ」や「地域卒業研究」において応用可能な部分もあり、有用な情報と位置づけることができる。

※実行委員会の活動の一部は、2015年度「由利本荘市地域づくり推進事業」による補助を受けている。

※本事例は、都市アメニティ研究室を共同運営している浅野耕一准教授と筆者および所属学生、関与した諸団体による成果である。ただし、本論は筆者の責任においてまとめた。

文献

山口邦雄(2011)。「地方中心市街地における都市計画道路の整備に伴う沿道空間形成の課題」『日本建築学会学術講演梗概集』F-1 157-158.

NPO 法人まちづくりデザインサポートHP(2015).
<http://www.meiji-architecture.com/diary1.html>.

アメリカ建築家協会 HP(2015).
<http://www.aia.org/about/initiatives/AIAS075265>.

Peter Batcher, David Lewis,(Ed.)(1985). *Urban Design in Action*. The Student Publication of the School of Design at North Carolina State University

秋田県立大学都市アメニティ研究室 (2014)。「2014年度都市アメニティ研究室夏期集中研究報告書」.

秋田県立大学都市アメニティ研究室 (2014)。「2014年度都市アメニティ研究室夏期集中研究成果パネル」.

秋田県立大学都市アメニティ研究室 (2015)。「2015年度都市アメニティ研究室夏期集中研究報告書」.

E.F.シューマッハー. 小島慶三他訳 (1986). 『スモールイズビューティフル』. 講談社学術文庫.

〔平成27年11月30日受付〕
〔平成27年12月10日受理〕

The Rebirth of Historical Landscape at Ishiwaki Street in Yurihonjo City The Case of Concentrated Research in Summer by University Laboratory

Kunio Yamaguchi ¹

¹ *Department of Architecture and Environment Systems, Faculty of Systems and Technology, Akita Prefectural University*²

Many local cities are trying urban regeneration in the age of a depopulation society. This paper reports on the practical research activity of the university laboratory concerning the rebirth of the historical landscape at Ishiwaki Street in Yurihonjo city. Our laboratory drafted a rebirth vision for Ishiwaki Street as a result of a basic investigation in August of 2014. With an announcement of our vision as an opportunity, an event to enjoy the historical landscape was proposed by a local group. The event was carried out with the involvement of many community organizations in August of 2015. The activity that the university laboratory began led to regaining the organic reaction nature of local resources. Based on this process, I discuss how the university is one component of the concrete local resources. In addition, I discuss that such a practical research activity is effective for the acquisition of the technique that cannot be obtained in a lecture.

Keywords: Local City, Urban Regeneration, University Laboratory, Historical Landscape, Tankororin